

## 書 評

濱田 琢司 著

『民芸運動と地域文化－民陶産地の文化地理学－』

思文閣出版 2006年2月刊

A5判 290頁 4,900円(税別)

著者の濱田氏は、これまで地理学の中ではいわゆる地場産業研究の対象として扱われてきた伝統工芸に対する新しい視点、すなわち文化的側面を含めた考察の必要性を主張する新進気鋭の研究者である。氏は福岡県小石原の研究以来<sup>1)</sup>、一貫して陶業産地と民芸運動に関する研究を進めてこられた。本書は2003年5月に関西学院大学大学院文学研究科に提出された博士学位論文「民芸運動と陶器産地をめぐる文化地理学的研究」を加筆修正してまとめられたものであり、上記の問題意識に基づいて濱田氏が続けてこられた研究の集大成にあたる最初の著書である。

評者は濱田氏による論文<sup>2)</sup>を初めて読んだ時の強い印象を忘れることができない。“「伝統」の自覚”という、いわば目に見えない現象が産地を変容させていくことを、いったいどのように実証するのだろうかと注意深く読んだ記憶がある。評者自身が工業地理学という枠組みを超えて伝統工芸を論じる視点を学んだ一つのきっかけは、氏の論文を通して得たものであった。それ以来、濱田氏が発表される論文をその展開をふまえて一つずつ見つめてきた評者にとって、本書は待望の一書であった。

氏は本書における問題の所在を明らかにする第1章において、「工芸を対象とした地理学的な研究は、地場産業研究として経済的側面を重視するものか、あるいは伝統工芸研究として各地域で生産されつづけている伝統工芸の生産体制や技術伝習について分析したものである場合が多い(20頁)」ことを指摘している。生産構造の把握に偏りがちであった従来の地理学が、産地の変容過程における政治的・文化的な側面からの影響に注目してこなかったことへの物足りなさがこの研究の原動力の一つとなっており、濱田氏は「工業」という枠組みで捉えられてきた対象の地域的・空間的特徴を、新しい側面から問い直すことを試みている。この新しい側面に光を当てるにあたって氏

が着目した主たる研究対象の一つは、「民芸運動」という文化運動である。本書によれば、民芸運動とは、「大正時代後期に柳宗悦が中心となって始まり現在も継続している工芸をめぐる運動である(55頁)」。この運動は、明治期から始まる産業の機械化・近代化の影響を受け、まさに消滅の途上にあつた日本の工芸品を民芸として再発見し、中央における展示会や出版物を通して価値付けていく運動であつた。

本書の内容を目次で示すと以下の通りである。本論では補章も含めると八つの章において、民芸運動と陶業産地との関係が考察されている。

### 緒言

第1章 工芸と地域文化をめぐる文化地理学

第2章 民芸と地域 一民芸運動の発生と民芸ブームの諸相から一

第3章 観光ガイドブックに見る工芸と地域 一九州地方のやきものの場合一

第4章 維持される産地の伝統 一大分県日田市小鹿田陶業と民芸運動一

第5章 産地変容と「伝統」の自覚 一福岡県小石原陶業と民芸運動との接触を事例に一

第6章 陶芸家濱田庄司の場所へのまなざし

第7章 職人か、芸術家か 一益子焼陶器産地の担い手の属性と技術習得過程をめぐる一

補章 地域からの実践と民芸運動 一三宅忠一試論一

### 結語

以下では各章ごとの内容を紹介しつつ、叙述の展開を追ってみたい。まず第1章では、問題の所在および地理学や隣接分野をふまえた先行研究と本研究の位置づけが述べられている。特に工芸という対象について、それを地域文化の問題として考察していく視点が提示されている。著者は日本美術成立の過程において、曖昧かつ多様な「工芸」という概念が形成されていく過程を詳細に再考する。そして、日本工芸の特徴が芸術と産業(工業)

を二つの極として広範な分野にまたがっている点にあることを指摘する。しかし、工芸をめぐる地理学分野の諸研究を整理すると、地場産業研究の一環に位置づけられるがゆえに、これまでは産業(工業)という側面に注目した研究が多く蓄積され、主に経済的側面から産地の分析が行われてきた傾向が明らかになった。著者はその背景として、文化性や芸術性を色濃く残す産地の多くが小規模な伝統工芸産地として存続してきたために、それら小規模産地が「経済的分析を重視する地理学における地場産業研究では、対象とはなりにくかった」ことを指摘している。そして、工芸が芸術と産業という二つの側面をもつ対象である以上、各工芸をめぐる経済的側面だけでなく、文化・社会的側面や芸術性への着目が必要であることが強調されている。

続く第2章および第3章は、本書の二つの対象である民芸運動と陶磁器(やきもの)を、本論の関心から位置づけたものとなっている。第2章では、民芸運動の草創期である大正末期と、民芸ブームという社会現象が生じた高度成長期という二つの時期に焦点を当てて民芸と地域の関わりが考察されている。他分野を含めると民芸運動自体に関する研究は少なくない中で、柳のまなざし、すなわち民芸を自覚的に選び取っていく価値観を「日本陶磁窯所在地図(第2-2図)」や「現在の日本民窯(第2-3図)」と商工省調査との比較から明らかにしていく分析は秀逸である<sup>3)</sup>。一方、高度成長期をも含めた具体的分析となると、その蓄積が少ない中で、民芸ブームを大正末期に始まる民芸運動との連続的な関わりにおいて分析した本章第VI節、第VII節は本書の意欲的な試みの一つとなっている。特に、新聞記事や雑誌記事を用いた分析から「民芸ブームは高度経済成長を背景とした農村部へのノスタルジアの高まりを受けた地方文化消費の動きの一つとして捉えることができる(81頁)」とする指摘は興味深い。著者がこのような資料を用いたのは、ある場所が情報として消費される際のメディアの影響をふまえてのことである。第3章では、89点の観光ガイドブックに掲載されたやきものをリスト化し、そこからやきもの産地をめぐる多様性や流動性を社会・文化的背景を加味しつつ考察している。本書によれば、1960~70年代に起こったいわゆる「やきものブーム」

によって、全国の陶業産地は大きく捉えて3つの展開を示した。すなわち第一に以前から生産が行われていながらもガイドブックに掲載されていなかったやきものが掲載されるようになる、第二に「民陶」といわれるやきものへ注目が集まる、第三に新興やきものが登場するという展開である。この3つの展開はこれまでの地場産業研究では看過されてきたものといえてよく、著者はこの展開を包括的に捉えるためには①経済的価値とは異なる価値からのまなざし(工芸のもつ芸術性、文化性)、②小規模(個人)生産者の出現、および①と②の流動性について言及する必要があると述べている。そしてその具体的な検討は次章以降で試みられている。

第4章および第5章では、民芸運動および戦後の民芸ブーム期の影響を産地の外部者からのまなざしとして設定し、現地の人々の対応や地域への影響が考察されている。この二つの章は九州地方における二つの具体的な陶業地域、すなわち大分県日田市小鹿田陶業と福岡県小石原陶業の詳細なケーススタディであり、迫力と説得力のある実証研究となっている。前者は機械化されない伝統的な形態が残された産地であり、後者は昭和30年代に伝統的形態の崩壊をみた産地であった。両地域に共通していることは、民芸運動との接触によって民陶として発見され、民芸ブームによってさらに一般へと知られることになったという点である。特に、窯元の意識が伝統に自覚的になっていくのは大正期ではなく、むしろ戦後のことであるという指摘は興味深い。一方、両地域で異なっていたのは民芸ブームに伴う産地変容の在り方であった。小鹿田は一切の機械導入を行わないことを自覚的に選択し、生産者の個人化に対する抑制が生じた。逆に小石原では伝統的陶業形態は1950年代後半から変容・崩壊し、陶工の独立や新興窯元の開業が相次いだ。また、技術習得の在り方が変容し、それによって「伝統」の自覚が生じた。この点については二人の人物の足跡を詳細に追うことを通して実証されている。著者はこのような小石原陶業の変容を伝統的形態から近代化・現代化への過程と単純に解釈するのではなく、むしろ伝統的形態の消滅が逆に「伝統」を再認識する機会となり得たことに着目する。両地域の展開の違いや、小石原で生じた上記の展開を著者は「外部

からの影響をめぐる内部での複雑な状況(283頁)」と意味づけた。このような解釈は従来の地場産業研究という枠組みだけでは指摘し得ないものであり、本書の優れた分析の一つとなっている。

第6章および第7章では、著者自身の故郷でもある、益子焼陶器産地と個人作家との問題を扱っている。第6章では「都市エリートによる地方発見のプロセス(194頁)」が陶芸家濱田庄司氏のまなざしを通して明らかにされている。益子焼陶器産地の形成に重要な役割を果たした濱田庄司氏が益子で生まれ育ったわけではなく、イギリス滞在を経て益子へ移り住んだことや、濱田氏が益子に築いたものは、あくまでも都市的な心性から田舎を再構成したものであり、作品発表の拠点は一貫して都市にあったことなどが指摘されている。第7章では無名の職人と作家という二つの側面が担い手として共存している日本の工芸産地の特徴的な在り方が検討されている。著者は特に、これまで産地研究では看過されることが多かった個人作家の意味づけを試みている。著者自身が行ったアンケート調査の結果から、現在の産地は作家という認識で作陶活動を行っている担い手が多くを占めていることが歴史的に示され、現在の産地を考察するうえでは個人作家に関する考察が不可欠であることが述べられている。このアンケートは156の担い手に関して、その経営形態、創業年次、従業員数、出身地、活動スタイル、益子焼への意識といった属性や技能習得方法などを明らかにしたものであり、産地内部の貴重な情報を提供するものとなっている。

補章では、第4章、第5章に深く関係する三宅忠一という人物の実践・思想・行動が検討されている。三宅は運動の内部にしながら柳および民芸運動の批判を行った人物である。著者は三宅が民芸の生産・流通・販売という経路を整備し、生産の論理の必要性を強く主張しつつ民芸運動から離脱した経緯を通して、民芸運動の特徴とその問題点を再考している。その結果著者は民芸運動を、「消費を中心とした運動」と捉え、「モノをめぐる運動でありながら、生産ではなく消費に主眼があった点こそが、民芸運動や柳の思想の問題点(254頁)」であり、そのオリジナリティであることを明らかにした。本章は三宅の人物像を通して民芸運動を逆照射し、我々読者が民芸運動と地域の

問題をあらためて相対化して考える機会を提供しているといえるだろう。

以上、本書に一貫する問題意識は、氏自身が益子焼陶器産地に生まれ育ち、氏の祖父にあたる濱田庄司氏が益子焼陶器産地の形成に多大な影響を与えた著名な陶芸家であったことと無関係ではないだろう。これは評者の想像の域を出ない指摘であるが、著者の問題意識は先行研究の整理によってその隘路を見出したというよりもむしろ、氏自身が益子という陶器産地に身を置く中で実感してきたことを様々な先行研究を通して再認識するとともに、読者である我々に対して明解に示してくれたという印象を受けるからである。氏自身は「調査者とインフォーマントの関係が様々な形で問われている時代(289頁)」に自覚的であり、「祖父について、あるいは祖父が少なからぬ関係を持った地域について、その孫が研究するという行為(289頁)」の意味づけを注意深く模索しつつも、「民芸運動や濱田庄司は、私にとって、とても興味深い研究対象になったのは事実」であると述べている。本書は陶業産地をその内部と外部の両視点から明らかにすることに特徴がある。このことは、陶業産地に生まれ育ったことによって備わった内部からみるまなざしと、研究を通して研ぎ澄まされた外部からみるまなざしを併せ持つ著者だからこそ実現した試みということもできよう。その点が本書をより魅力的なものにしているように思われる。

さて、これまで概観してきたように本書の主たる意図は、「民芸運動と陶器産地という具体的地域を、文化的側面を重視しつつ考察(10頁)」することにあった。言い換えれば、「文化的イノベーションとしての民芸と、その民芸というカテゴリーに取り込まれるようなものを作っていた産地との影響関係について多面的な角度から考察していく(3頁)」ことにあった。以下ではそのような論点を中心に、本書の意義を整理しておきたい。

なぜ地理学における工芸研究にとって文化性・芸術性の問題に着目する必要があるのだろうか。この問いに対する著者の考えは、主に第1章後半部分および結語にまとめられている。著者は産地や生産者にとって、観光などによって生成される文化・伝統の在り方や外部からのまなざしによる価値の変動が大きな影響を及ぼしうる重要な要素

であることを、文化人類学や観光研究などにおける工芸研究の蓄積から学んだ。それらの研究はいずれも、産業的な視点から生産体制や流通、製品を考察するよりも、それが求められる社会的な背景などに考察を加え、「近代化」という単線的なベクトルによる産地変化の考察では把握できない様々な事象について議論するものであった。このような視点が小規模な伝統工芸産地の本質的特徴と深く関わるものであることに気付いた著者は、本書を通じて「民芸運動のまなざしによる、この価値のステージの移動が、その産地および生産者に大きな意味を持ったであろう(42頁)」ことや、「外部者によって新たに創造された価値やまなざしが(42頁)」地域文化(産地)に与えた影響の大きさを第三者に向けても説得的に示したのである。

地理学的研究における本書の意義はその研究視点や手法にも見出される。本書の重要な概念である「まなざし」、「伝統の自覚」、「意識」、「イメージ」などはいずれも目に見えないものであり、実証する際に伴う苦労は想像に難くない。しかし、著者は旅行ガイドブックや新聞記事、アンケート調査や聞き取り調査、日記や写真など多様な史料を自在に用いて分析を進めている。また、民芸運動と高度経済成長期における民芸ブームを連続的に分析した点も評価される。これら本書の視点や方法は歴史地理学だけでなく地理学、あるいは工芸に関わるあらゆる諸分野の研究進展に寄与するものであるといえよう。

最後に今後の展開として成果が待たれる点について述べておきたい。著者自身は「工芸という概念をめぐるより詳細な考察」、「経済的側面につい

ても正確に把握する必要」、「多くの事例を把握する必要(286頁)」を課題としてあげている。評者としてはさらに、第6章で触れられていた「地方に対するまなざし」、とりわけ近代化と都市と農村の関係についてのさらなる議論の展開を期待したい。なぜなら、この問題は本書で取り上げられた民芸運動と陶業産地の関わりだけでなく、明治・大正期の近代化や高度経済成長期という時代の変革期を包括的に検討する視点を含んでいるからである。これは本書が単に地場産業研究の枠を越えた新しい研究であるというだけでなく、より広く歴史地理学や地理学、さらには他分野における近代化論や文化論をめぐる諸問題とも深く関わる研究であることを裏付けている。多くの読者が本書をきっかけとして、隣接分野と議論を深めながら新しい視点を提示する著者に学び、地理学において今後ますます着実かつ学際的な諸研究が蓄積されることを期待したい。

(湯澤 規子)

#### [注]

- 1) 濱田琢司「産地変容と「伝統」の自覚—福岡県小石原陶業と民芸運動との接触を事例に一」、人文地理50, 1998, 606~621頁。
- 2) 前掲1)。
- 3) 柳宗悦が産地を選び取っていく過程は、小畠邦江「柳宗悦の足跡と産地の地図化—「日本民藝地図屏風」の成立を中心に—」、人文地理53, 2001, 230~247頁、によっても明らかにされている。